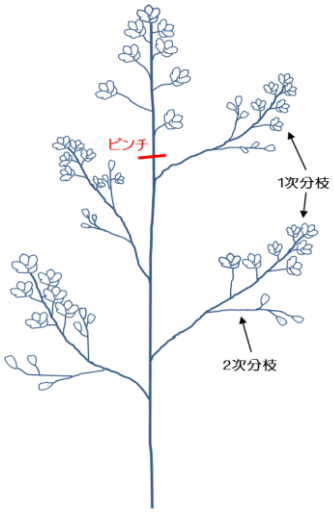
３　花　　き

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） 〇デルフィニウムの栽培管理 〇シクラメンの仕上げ時期の管理 〇施設花き類の防寒対策
（１）デルフィニウムの栽培管理	＜シネンシス系‘さくらひめ’＞ ９月中旬に定植した一番花の出荷時期は12月中旬からとなる見通しである。  写真１‘さくらひめ’の出蕾状況 ア　ピンチ 11月に入ると出蕾が始まり（写真１）、頂芽の生長とともに下部の蕾の間隔が空き始める。全体がほぐれ、主枝の最下位の花と最上位の一次分枝の区別がついた段階で頂芽をピンチし、一次分枝をスプレー状に開花させる（図１）。  図１　さくらひめのピンチ位置 イ　温度管理 最低温度は10℃である。それ以下では生育が緩慢になり、採花遅れや二番花の生育遅れになるので留意する。日中は20～25℃で管理する。 ウ　電照 日長が短くなる11月上旬から電照を開始し、日長延長により生育を促す。ＬＥＤ球（赤色）で17:00～19:00の２時間、白熱球で17:00～21：00の４時間を目安とする。 エ　かん水管理 出蕾後はかん水量を少なくし、土壌表面は乾燥気味にする。 オ　施肥管理 追肥は葉色を確認しながら行う。窒素、リン酸、カリとも成分量で４～６kg/10 a を月に１回程度施用する。ただし、緩効

項　　目	作　　業　　内　　容
	性肥料を用いていれば追肥はしない。 　ハウスを閉め込む機会が多くなると、うどんこ病の発生が多くなるので適切な防除に努める。 ＜エラータム系＞ 　10 月上旬に定植した一番花の出荷時期は 12 月下旬からとなる見通しである。 ア　温度管理 　温度は最低でも 13℃になるよう保温・加温する。高温による早期抽台株は、一番花を採花すると株が弱り、二番花以降の採花に影響する。そのため、摘蕾して株に養分を蓄え、他の株の収穫に合わせて株元まで切り戻す。ただし、ほとんどの株が早期抽台した場合は年内採花を諦め、最低夜温を８～10℃に下げ生育をゆっくりにし、株の充実を図る。日中は 20～25℃で管理するが、日中 25℃以上で管理すると寒暖差によって花とびや奇形花になる場合がある。 イ　かん水管理 　出蕾後はかん水量を少なくし、土壌表面を乾燥気味にする。 ウ　施肥管理 　追肥は葉色を確認しながら行う。窒素、リン酸、カリとも成分量で４～６kg/10 a を月に１回程度施用する。 　ハウスを閉め込む機会が多くなると、うどんこ病の発生が多くなるので適切な防除に努める。
（２）シクラメンの仕上げ時期の管理	11 月は夜温が低下してくるため、15℃以下にならないよう適切に保温・加温する。ハウスを閉めると灰色かび病の発生が多くなるため、暖房機の送風ファンや循環扇等で空気を動かす。  写真２　出荷期を迎えたシクラメン 　開花期以降の追肥は、窒素：リン酸：カリ比を２：１：３程度とし、５～６日に１回窒素濃度で 75～100 mg/ℓ（ppm）の液肥を、株の状態を見ながら施用する。また、蕾が上がり開花し始める頃から、固形肥料を５号鉢で２～３粒置く。

項　　目	作　　業　　内　　容
	出荷予定時期の１か月前より、開花した花茎の抜取りを止める。５号鉢では 20 本、６号鉢以上では 30 本程度の花茎が揃ったら出荷する（写真２）。
（３）施設花き類の防寒対策	気温の低下に対処できるよう、施設栽培では以下の防寒対策を講じておく。 ア　古くなった被覆資材は新しいものに張り替え、ハウス内への日射透過量を多くする。施設内をできるだけ気密にするため、破損箇所は補修する。内張被覆を併せて準備し、出入口は二層～三層カーテンを設置して冷気の流入を防ぐ。 イ　暖房機の安全使用（不着火、不完全燃焼防止）や熱効率を高めるため、事前に燃焼室の掃除をする。また、サーモスタットは精度の高いものを選定し、生育に応じて調整し、生育適温以上の暖房を行わない。 ウ　暖房機からの温風誘導ダクトは、施設内の温度ムラが少なくなるよう適正に配置する。送風ファンを設置して、ハウス内の温度ムラを解消する。

（作成　農林水産研究所）